

## 式 辞

長崎県立吉岐高等学校第六十二回卒業証書授与式

日ごとに春の訪れが感じられる今日この頃、ここ喜応寺ヶ丘でも、春一番とともに、季節の変化の足取りが早くなりました。校庭の桜のつぼみも、かすかにふくらみはじめました。

本日、三月一日、春の光を浴びて、あらゆる生命が躍動感に満ちあふれ、旅立ちにふさわしいこの佳き日に、長崎県立吉岐高等学校第六十二回卒業証書授与式を挙行いたしましたところ、大変お忙しい中、吉岐市副市长 久田賢一様、県議会議員 山口 壮二様、市内中学校校長先生・教頭先生を始め、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、盛大に、卒業式を執り行うことができますことは、在校生、職員挙げて、慶びとするところであります。心から厚くお礼を申し上げます。

保護者の皆様、並びに里親の皆様、吉岐高校での三年間、「自律 明朗 友愛」の校訓のもと、勉学や部活動に励み、お子様が凛々しく、立派な若者として成長された今日の晴れ姿を目の当たりにされ、安堵のお気持ちとともに、一つの大きな節目を迎えられましたこと、お慶びもひとしおのことと拝察致します。これまで、本校の教育活動に対するご理解とご協力を賜りましたこと、誠に有り難うございました。職員を代表して感謝とお礼を申し上げます。第でございます。

さて、只今、二百二十四名の諸君に卒業証書を授与いたしました。

あらためて、第六十二回卒業生諸君、卒業、誠におめでとうございます。今、君たちは、「卒業」という大きな節目を一つの通過点として、更に大きく飛躍する時を迎えています。

君たちが過ごした吉岐高校での三年間を振り返ってみますと、平成一九年四月の入学以来、佐世保青少年の天地での宿泊研修、長野県でのスキー修学旅行、二年生の時、大分県日田市で行った学習合宿、そして、「総合的な学習の時間」で学習した、「吉岐学検定」は、「創立百周年事業のひとつ」、「(アイ)プロジェクト」の先がけとなりました。夏に行われた佐世保地区高校野球新人戦での優勝は見事でした。三年生になって、休まず続けた昼休みの公務員適性検査の練習や、阿蘇での学習合宿では、自らの将来を見据え、集中して取り組みました。高体連開会式、吉岐高大選手団の入場行進や「吉岐高魂」を見せつけた各部の戦いぶりも立派でした。東京のZエスホールで行われた、放送部の「Zエス杯全国高校放送コンテスト」出場や、京都外国語大学主催の「全国高校生中国語スピーチコンテスト」で初出場ながら、優勝と3位を獲

得したその活躍は、日々の努力が実を結んだ成果であり、君たちの活躍は、学校に活気をもたらし、吉岐高校の名を全国に知らしめました。数々の「創立百周年記念事業」では、君たちのリーダーシップのもと全てを成功裡に終えることができ、記念事業を通して、百年の歴史と伝統を持つ吉岐高校の生徒としての自覚と誇りを持って行動することができました。昨年秋、満を持して迎えた、「創立百周年記念式典」での君たちが醸し出す凜とした空気は、正にその現れでありました。青春のページに残る記念煌雪祭での君たちのリーダーシップも忘れることができませぬ。自分たちの力で築き上げ、盛り上がった文化祭・体育祭は、「青春の最高のステージ」でした。

また、一昨年から続く世界的な経済不況の波は、君たちの就職・進学にも大きな影響を及ぼしました。その厳しい状況の中で、君たちは努力を怠らず、果敢に挑戦しました。大学入試センター試験は、今年も本校で実施され、緊張の中、雑念を廃して、集中して受検に臨むことができました。

校長室での君たちとの語らいでは、君たちの将来についての希望や、吉岐高生としての思いを語ってくれました。私にとっては、大変楽しい有意義な時間でした。あらためてお礼を言わなければなりません。本当に有り難う。

吉岐高校での三年間、喜応寺が丘で過ごした青春の日々は、今、君たちの胸中にどのように去来しているのでしょうか。

卒業する君たちの前途を祝し、はなむけの意味を込めて、私も二つだけ、希望と思いを述べてみたいと思います。

まず、一つ目は、「ふるさと吉岐」への思いを持ち続けて欲しいということです。

君たちは、この吉岐の島で育ちました。人間は日常の中では、大事なことにはなかなか気づかないものです。これから、吉岐を離れ、新しい社会で生きていく中で、いつか、遠く故郷を思うとき、この豊かな自然と人情味溢れる『島の心』に育まれた大事なものが何だったのか、きつと気づくはずです。その「大事なもの」を大切にしてください。感謝の気持ちと共に、ふるさと吉岐の素晴らしい景観を思い浮かべ、飛躍へのバネとしてもらいたいです。

二つ目は、「人との出会いと、人とのつながりを大切に生きて欲しい」ということです。

「人」という文字のつくりは、二人の人が寄り添ってできています。人は、一人では生きていけないということでしょう。君たちが飛び立つ社会という環境は、人と人が支え合い成り立っているものです。社会人として生きていく中で、時には人に支えられ、時には人の支えになり、人間関係が作り上げられていきます。そこには、多くの人との出会いがあります。良い出会い

を察知する力と人を支えることができる力を養って欲しいと思います。人生の喜びも悲しみも、つまるところ人と人との出会いの中で展開していきます。私たちは、「生まれる時代」を選ぶことはできませんが、「生き方」を選ぶことはできます。世界に目を向けると、各地の地域紛争は後を絶たず、環境破壊は地球規模で進行し、世界的な経済不況は今でも尾をひいています。深刻さを増す、先の見えない混沌としたこの時代には、若者にとって希望に胸膨らませて生きることが困難なことのように思えます。しかし、社会の中で、傷つき、悩み、苦しみながらも、互いに支え合い、大切に思い合う心があればこそ、生きる励みとなり、人として成長することができると思うのです。

以上、「ふるさと吉岐」への思いを忘れないで欲しいということ、「人との出会いの中で人として成長して欲しい」という二つの希望を述べました。

吉岐高校は、明治四十二年に開校以来、一世紀の歴史を刻み、卒業生は、二万一千名を超えています。そして、先輩方は、国の内外を問わず、各界の第一線で活躍されています。伝統ある吉岐高校の卒業生として、自信と誇りを持って、思い出の喜応寺ヶ丘から、一人ひとり、それぞれの夢と希望へ向かって、春風の中へ元気よく飛び立ってください。

最後に、創立百周年を迎えた吉岐高校の、更なる発展を目指して、在校生、保護者の皆様、教職員一同、力を合わせて魅力ある学校づくりに邁進することを、巣立っていく君たちに誓いたいと思います。

いよいよ、お別れの時が近づいて来ました。

長崎県立吉岐高等学校第六二回生 卒業万歳！

十八歳の旅立ちに 万歳！

前途ある君たちが、未来を信じて、力強く第一歩を踏み出し、健康で元気に活躍されることに、万感の思いを込めて、私の式辞といたします。

平成二十二年三月一日

長崎県立吉岐高等学校長

廣瀬典治